

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科 コミュニティ福祉学 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	コミュニティ福祉学 研究科・ コミュニティ福祉学 専攻・4年		任 賢 宰 印
指導教員	所属・職名		氏名
	コミュニティ福祉学部		森本 佳樹 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題名	認知症高齢者と家族へのケアモデル構築に関する研究 — 親密性の変容に焦点を当てて —		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名
研究期間	2011 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

認知症高齢者を支えている家族介護者の二者関係において親密性の変容が「不適切な関係」（虐待、介護殺人など）の素となるという仮説が出された。そこで、日本と韓国の認知症高齢者と家族介護者の二者関係において「不適切な関係」へつながらない適切な介入方法及び介入時期の析出のため、家族介護者と専門職からサービスの利用状況と意識を明らかにすることを目的とする。

そのために、日本と韓国の都市部における調査(2010年)に続き、地方における家族介護者と専門職双方から、サービス利用の実態について調査を行う。当事者である家族介護者の主観的観点と主観的観点だけでは見出しにくい事項も想定されるため、専門職の客観的観点からも調査を行う。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[認知症高齢者] [家族介護者] [親密性の変容]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

日本は、2000年に施行された介護保険によって、家族のみに介護を負わせた従来の在宅介護から、高齢者の状態に合わせて公的に認定された社会的援助を受けながらの家族介護へと変化してきた。しかし、在宅介護志向ともいえる現在の介護政策は家族介護者がいることを前提としているのに対して、社会の変化に伴って崩れつつある家族形態の変化によって、介護の形態も急激に変化しつつある。たとえば、①戦争を経験して現代日本経済の踏み台を作った「今の介護対象」の高齢者は、家族からの介護を期待できる世代といえる。②日本の高度成長期の推進力となり世界屈指の経済国日本を作ってきて、現在は「今後の介護の課題」としてあげられている団塊世代については、家族介護への期待が減り、家族の介護と共に社会的介護が今よりさらに求められる世代といえる。③経済先進国のもとで生まれ、豊かさを体験して「今のまま」を大事にしている世代は、核家族や個家族とも言われ、家族による介護は期待できず、社会的介護のみの「西洋型介護」を期待する世代といえる。以上のような急激な変化に社会的支援システムが追いつくことができなくなっているのが現状である。また、現在の介護保険制度は要介護者本人に給付する保険であるため、通所介護や短期入所といったレスパイトの色彩の濃いサービスも、基本的には本人に対するものであり、家族介護者に焦点化した支援とは言い難く、それらは身体的な解放が優先されていて、家族介護者への心理・情緒面への直接的支援は、介護保険実施10年を経た現在にもほとんどなされていない。自治体ごとに相談窓口は増えたといえるが、利用者側から相談窓口を利用できる体制は不十分で、加えて家族への支援は見過ごされている。一方、韓国においても、2008年7月から老人長期療養保険が全国的に施行されたが、韓国の認知症高齢者に対する支援システムは始まったばかりで、3ヶ年になる保険制度には解決すべき問題が多い。日本と韓国は、同じ高齢化社会にあり、社会・文化的にも似ている面が多い。家族についても西洋とは異なる『イエ』という意識を持っており、そうした意識のもとで心理・情緒面でも強く結ばれているため、支援を考える際には、心理・情緒面の支援は欠かせない側面である。とは言え、心理・情緒面を踏まえた家族介護者への適切な支援のあり方についての研究は遅れており、とりわけ、認知症者の介護過程ごとの支援モデルの構築が急がれるところである。

以上の課題について、修士論文において、「離れられなさ」に焦点を当て考察を行い、身体解放が心理・情緒の解放とつながっていないことを明らかにした。さらに、「離れられなさ」の根底に親密性という諸感情があり、その親密性(intimacy)の変容によって病理(共依存、うつ、虐待、介護殺人、自殺など)へつながるのではないかという仮説①と適切な支援の介入方法及び介入時期によって共依存への傾向に陥らないという仮説②が析出した。仮説①については、文献研究を行い、自発的に選択できない家族という特殊な関係であるがゆえに、家族も介護を自発的に選択できない。長期の介護期間を要する認知症高齢者の介護は、介護の状況や過程によって心理的変容が発生しやすく、家族という特殊な境界で生じる嗜癖的な関係によって共依存の傾向へ向かう結果になる。認知症高齢者を支えている家族介護者の中には、介護する側が何らかの状況や過程によって介護される側を必要とする「共依存」という病理へつながり、介護問題(うつ、虐待、介護殺人、自殺など)を引き起こす場合もあるという結果を得た。一方、仮説②については、2010年5月に家族介護者462名を対象として実施した量的調査から、家族介護者への適切な介入時期、介入過程、効果のあるサービスなどについての大雑把な把握を試みた。また、親密性は、介護の前より介護をはじめてから高くなるという結果も得られた。さらに、自由記述の分析から、介護者への支援を考える際の要因として家族介護者は、「精神的側面」、「対象者側面」、「サービス側面」の3つがもっとも優先的に挙げられ、次に「現実的側面」が優先されていることが明らかになった。しかし、この研究は家族介護者を対象とした調査のみの結果で、ケアマネジャー等の専門職の客観的観点が入っていないこと、調査が一部の地域に限られているため、結果が偏っていると考えられることなど、不十分な点が多い。そこで、専門職を対象とする客観的観点からの研究と、複数の地域での家族介護者を対象とする研究が今後の課題が残された。以上の課題を踏まえて、今後の研究方向への確立のため、日本と韓国の地方における家族介護者(既に介護を終えた介護者)と専門職(ケアマネジャーと療養士、社会福祉士)を対象として、介護の以前から介護をスタートし、サービスの利用が介護の過程にどのような影響を与えているのかについてインタビュー調査を行った。

なお、調査対象者に対して研究のテーマ、目的、内容に加えて、情報は保護されること、研究への協力は自由意志であること、承諾した後であっても協力を中止できることなどを含む研究協力依頼書を作成して説明し、研究協力への承諾書を取った。また、インタビュー対象の特定につながると思われる内容については、個人情報保護のため記号や英文字で記述している。

【調査の概要】対象は、日本と韓国の地方(大牟田市・順天(スンチョン)市)で、既に介護を終えた家族介護者2名と、認知症高齢者の関連施設(小規模多機能居宅介護事業所・在宅支援派遣センター)に勤めているケアマネジャー1名と療養士1名、社会福祉士1名の専門職の総5名であった。

研究成果の概要 つづき

方法は、半構成的面接によるインタビューであり、インタビュー項目については、日本と韓国のサービスの差異や専門職と家族介護者が違う立場であることを考慮し、それに準ずる項目に構成した。インタビュー項目は、対象者と被介護者の簡単なプロフィールを尋ねた後、介護を行っている家族介護者の支援に対する意識と時期による支援策に接近するために、①家族介護者と専門職ともに主観的もしくは客観的観点から認知症の進行に伴って、心理的変容があったのか（主に二者間の親密性）、サービスの利用がどのように作用したのか、認知症の進行とともに必要であったもしくは必要であるサービスについて尋ねた。また、②専門職には、家族介護者の支援をどのようにしているのか（介入時期・方法）について尋ねて、家族介護者には、介護を終えたことから介護がスタートしたときから終えるまでの経緯とその間利用したサービスについて尋ねた。半構成的面接（インタビュー）は、録音を取ることにについて了解を得て実施した。また、データの信頼性を高めるための面接時の留意事項として、対象者が語ったもののすべてを分析対象とした。面接時間は 30 分～1 時間 30 分、平均 1 時間であった。調査期間は日本と韓国の調査であることから、2011 年 8 月に韓国のインタビュー調査を行い、2011 年 11 月に日本のインタビュー調査を行った。分析は、既に介護を終えた家族と専門職ということを勘案し、時期とサービスの利用による着目して、ナラティブ分析を行った。インタビューについては、逐語を行い、研究と関係ない語りは削除した。

【調査の結果】認知症状の進行に伴う支援の時期について、①家族介護者は両国ともに介護を終えていることから「認知症の症状や進行などについて情報がなくて大変だった」「認知症について知識が少ない病院へ入院することで症状の進行が速くなっていた」「一人で何とかしようと思ったが、体に無理がきて病になった」「サービスを利用することで余裕ができ、心理・情緒的にも助けられた」「施設入所によって介護を終えた時は罪悪感がしばらく続いた」など、2 名とも、結婚と同時に被介護者と同居をしていて本当の親子と思い、介護をしていく中でも認知症高齢者を理解し、受け入れようとしたと述べていた。②専門職からは「家族介護者の中には自分一人で頑張ろうと精神的に追い詰めていて虐待に至る場合もある」「サービスの利用によって二者間において肯定的な変化があらわれた」など、二者関係の介護問題と、サービス利用に対する肯定的面をあげていた。

サービスの内容については、両国ともに「デイサービスとショートステイを主に利用していたが、必要とき利用できない場合が多く、時間も決まっておりで大変なことが多かった」、韓国においてサービスの利用が始まったばかりであることから「デイサービスの利用によって昼間に余裕ができ、家事や個人の用事を済ませるようになった」「デイサービスで手作業ができ、落ち着くようになった」「ショートステイの利用は予約が必要で、必要な時に利用できなかった」と述べて、デイサービスとショートステイのメリットとデメリットを挙げた。また、「施設の入所ができたが、入所後のしばらくは周りの視線が気になっていた」「親を施設に入れることは考えたことがない、自分で頑張ろうと思った」など、入所施設の利用は周りの視線や親に対する罪悪感など否定的であって、専門職からもほとんどの家族介護者は、介護者が病になるとしようがなく入所を考えていると、やむを得ず入所を選択する家族介護者の状況について述べていた。都市部と同じく、日本と韓国の異なる点としては家族介護者や専門職のほとんどが宗教を持っており（特にキリスト教）、心理・情緒的に頼って、助けを求めて、宗教の中で支え合っていることが伺えた。さらに、両国ともに介護を終えた家族介護者の現在は、ボランティアや介護職など、認知症高齢者と家族介護者をサポートする側になっており、認知症高齢者と家族介護者の支援につて勉強し続けていた。

【調査の考察】本研究では、家族介護者 2 名と専門職 3 名のインタビューから認知症高齢者を支えている家族介護者の二者関係において「不適切な関係」につながらない適切な介入時期及び介入方法を析出するために、介護をする前から終えるまでのプロセスを探ってみた。家族介護者は親若しくは夫婦であることから介護を当然視するか、義務として思っていた。インタビュー調査から伺えることは、量的調査や都市部の調査から明らかになったように、認知症になる前の関係から症状がわかり、その症状を理解して、サービスを利用できるまで受動的な受け入れと能動的な受け入れを繰り返すプロセスをもって確立していくと言える。その反面、従来の認知症高齢者と家族介護者への支援は、「認知症の症状」という医療的症状にとらえて、生活全版に与える影響、特に家族という血縁にまつわる概念は見過ごしてきた感は否めない。認知症介護者と家族介護者の実態から現実と支援の格差があり、場合によっては支援そのものがマイナスに繋がっているともいえる。今後、認知症高齢者を支えている家族介護者の支援に必要な方針として、認知症状にとられた「あるべき支援」の追求から、サービスという名のもとで認知症高齢者と家族介護者を引き離さず家族の中で「多様な生き方の支援」の転換を視野に入れ、一人ひとりのニーズにこたえることにつながる支援システムが求められる。

※ この（様式 2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式）を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① <立教大学コミュニティ福祉学研究科紀要>

「認知症高齢者と家族介護者の二者関係における支援に関する研究：文献検討—家族介護者の親密性と共依存に焦点を当てて」第8号、2010年、3-14。

<立教大学コミュニティ福祉学研究科紀要>

「認知症高齢者を支える家族介護者の心理的変容とサービス利用に関する研究—家族介護者のアンケート調査における自由記述回答の分析」
『立教大学コミュニティ福祉学研究科紀要』第9号、2011年、3-15。

<日本認知症ケア学会誌>

「認知症高齢者を支えている家族介護者の支援システム構築に関する研究—心理的変容とサービス利用に着目して」2012年4月投稿予定。

④ <第9回日本ケアマネジメント学会>

「認知症高齢者を支えている家族への支援に関する研究—介護者の心理的ステップとサービス利用状況における親密性の変容に焦点を当てて」2010年8月、演題発表。

<第25回日本地域福祉学会>

「認知症高齢者と家族へのケアモデル構築に関する研究—介護者の心理的ステップとサービス利用状況に焦点を当てて」2011年6月、演題発表。